

New History of World Art

世界美術大全集



第23回配本

第15巻 マニエリスム

内 容

- | | |
|-----------------|---------------------|
| 2 巻 頭 対 談 | 田 淵 安 一
若 桑 み どり |
| 6 美 術 館 案 内 | 伊 藤 一 刀 斎 |
| 8 アート・エッセイ | 曾 野 綾 子 |
| 9 世界美術の
廻廊から | 辻 邦 生 |

小学館

伝説と共に生きる街

伊藤一刀斎

プラハは、母なる大河ヴルタヴァ（モルダウ）の胸に抱かれ、街は河と共に息づき、歴史は河と共に流れる。

チェコの国民的作曲家スメタナは、ヴルタヴァの深い水の流れと、人々の喜びと悲しみを重ね合わせ、音楽による一大叙事詩を完成させた。

フス教徒戦争、ハプスブルク家の支配、三十年戦争、民族復興運動など幾多の苦難を乗り越えてきたチェコの歴史と、幻想的なボヘミアの自然を重ね合わせたこの名曲に、スメタナは人々の力強い生命力を大河ヴルタヴァの悠々と、そして壮大な流れに投影した。

13～14世紀頃、このヴルタヴァを中心に、東岸の「旧市街」と「新市街」、西岸の「フラチャスィ地区」と「小地区」が相次いで建設され、それ以来現在に至るまで、プラハの都市計画はあらゆる面で、大きく変化してはいない。

灰色の空へと伸びた百塔、夢と現実が絡み凝固した古き家々、その間を縫って走る幾重もの迷路、永遠と瞬間が織りなす幻想が、何か遠い過去の世界から訪問者に悠然と声をかける。

古い石畳と迷路のような小路、広場と教会が生み出すコントラストの深さ、数百年を経た4、5階建の建物が空間を惜しむかのように軒を連ねる街、それはロマネスクに始まって、ゴシック、ルネサンス、マニエリスム、バロックと複数の様式が見事な調和を示し、今でも変わらぬ姿を誇る「建築博物館」の街、古くから、「黄金の街」、「百塔の街」（実際には四百塔位だろうか）、「もっとも美しい内陸の街」、「論争の街」、「錬金術の街」、そして「伝説の街」と、多くの呼称で親しまれてきたプラハ。多分、丹念に街を歩いてみれば、その由を十分に感得できるだろう。

西欧社会で、合理的・主知主義的傾向が人々の空想を枯渇させてしまったときでさえ、プラハではその神秘的な雰囲気、人々の想像力をかきたて、グスタフ・マイリンクやレオ・ペルッツ、そしてフランツ・カフカに幻想小説を書かせ、数多くの伝説を生んだ。

プラハはさまざまな伝説を生み、その伝説と共に生きる街である。恐らく、16世紀後半から17世紀初頭にか

ての時代、すなわち、マニエリスムからバロックに至る、奇妙に生彩に富んだ、シンクレティスティックな、知的洗練と過剰な装飾趣味に彩られたこの時代が、プラハをして「神秘的な伝説の街」といわしめる重要な契機になっているように思われる。

皇帝ルドルフ2世（在位1576～1612）が君臨していた当時のプラハは、ヨーロッパの知識人たちにとって、古代ローマのハドリアヌス帝の時代のローマのごとき、西欧マニエリスムの一大中心地となっていた。

また、この時期は、ティントレット、エル・グレコ、ゴンゴラ、シェークスピアなどの傑作を矢継ぎ早に世に送り出している。いわばこの時代は、ルネサンスに端を発する文芸と思想の爛熟期であり、マニエリスムの絶頂期であった。

ルドルフ2世は身边に、一種異様な知的サークルをつくり上げ、父マクシミリアン2世の時代から宮廷にいた学者、科学者、芸術家のグループをどんどん拡張していった。イタリア、フランドル、スペインなどから数多くの学者や芸術家を呼び寄せたルドルフ2世のフラチャスィの宮廷は、さながら玉石混淆の宝石箱のようなものであった。その乱反射する光のなかで共通項といえば、正にマニエリスムにほかならなかった。

ルドルフ2世が、宮廷肖像画家アルチンボルドを伯爵に叙勲する頃には、すでにプラハの宮廷は、ハドリアヌス帝のアカデミアに匹敵する芸術家、学者のグループを擁していた。

一般に、ルドルフ2世は「政治的に無能で不幸な皇帝」といわれているが、彼の錬金術、占星術に寄せた異様な関心と美術愛好家としての見識、珍奇なものに向けられたファナティック（狂信的）な蒐集癖には並々ならぬものがあつた。

政治や日常的現実から逸脱したルドルフ2世を、プラハの人々は「悪魔と契約を結んだ皇帝」と噂していたが、あらゆる知識を渉猟した後に、かのファウストが更に新しい究極的な世界像を求めたように、ルドルフ2世もまた、天体望遠鏡を覗き、レトルトのなかを見つめ、怪物を観察しては、いつも超自然への思いに駆られていたのである。

私は、早朝のあるいは夕闇迫るところのこの街が、一種独特な幻想を醸し出す瞬間を何度も描いたが、描けば描くほどにルドルフ2世が抱いていたような想念に捕われ、呪縛されている自分にふと気づくことがある。以前、チェコ・テレビの取材を受けたとき。レポーターが「もし、プラハで創作活動が続けることになったなら、あなたの作品は変わるか」といったような質問を受けたが、確か「そう変わることはないだろう」と応えたように思うが、今の私は、この街の呪力に崇られているようだ。

プラハ城のあるフラチャスィ地区のいちばん高い丘のうえに、12世紀に建造されたストラホフ修道院(国立文学博物館)がある。私の好きな教会のひとつであるが、これもプラハのほかの歴史的建造物同様、もともとロマネスク様式の建物のうえにさまざまな改装が加えられ、一種独特の雰囲気と魅力を醸し出している。この雰囲気というのも、私がほかのヨーロッパ諸国で実見した教会のすべてが、遠い過去から連なっている揺るぎのないキリスト教的伝統に支えられ、正にこれがキリスト教建築だというのとは、まったく様相を異にしている。それは汎神論的ともいえる独自の信仰が、建

物の隅々にまで行きわたっているといった趣で、思うにチェコの人々は、昔からキリスト信仰にはあまり熱心ではなかったのではないかとさえ思われる。それゆえ、チェコの人々は内容豊かな伝説の世界を創造し、そこに数多くのヒーローを見出し、とくに聖ヴァーツラフ王はチェコの人々の心の支えとなり、また民族意識を高める大きな原動力となったのだと思われる。だから、ストラホフ修道院をはじめとするプラハの建造物に、私が子どもの頃から抱いていた架空の都市像を重ね合せたとき、見事にふたつが重なり合い、私は何ともいい知れぬ愉悦の世界にひたることができる。これは、ほかのヨーロッパの街では味わえないことである。

私にとっての愉悦の街、プラハをこよなく愛したモーツァルトは、このストラホフ修道院でオルガン演奏をした。そして、私の展覧会もここで催された。この修道院

で、私と同じようにモーツァルトも伝説の味を噛み締めていただろうか。

ところで、もうひとつこの街について触れておきたいことがある。近代建築が機能性を重視するようになってから、建物の美観は著しい変革を遂げたが、ありとあらゆる対象に機能性を与えようとする意図は、実に非有機的、非人間的で、主体的人間像などというのはどこかに消し飛んでしまっている。こうした「機能を抽象して、実体を捨象する」という方向に、プラハという街は一石を投じている。古いものに愛着をもち、育むというプラハの人々の態度は、この街の3500余りの建造物が「保存記念建造物」に指定され、守られているという事実にも如実に表れている。四半世紀のうちに、都市の4分の1がガラリと変わってしまう、どこかの国のどこかの都市とは随分違うものだ。

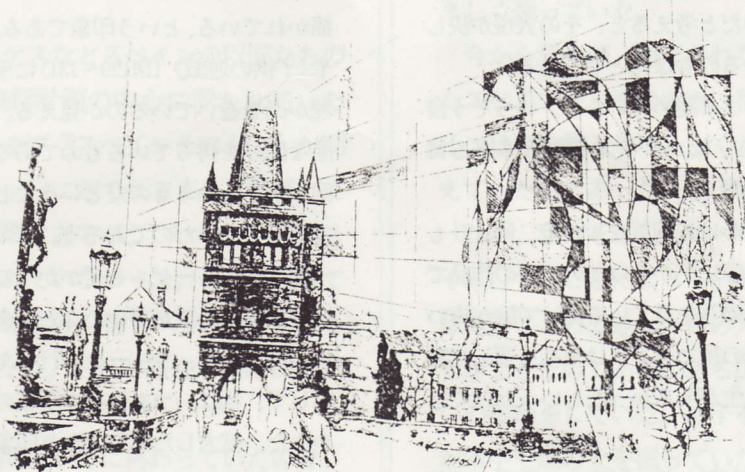
一見機能性を欠如しているかに見えるこの街には、住民の街に対するつつましい愛情がある。愛情は事物を慈しむことであり、手垢で汚れているかもしれない。そこには途方もない長い時間が働いているからである。人間味のある場所、人間的な交流のできる生活空間、あらゆる年齢層の

住民が共感し得る街。プラハはその要求を今もって十分に満たしている。

——16～17世紀の人々の、超自然や錬金術への執着が、過度な装飾性と結びついて、この時代を幻想的で神秘的な雰囲気にもりたて、マニエリスムという共通語を生み出した。科学が魔術と混同されたように、芸術も魔術と混同され、この三者はひとつの目的、つまり、この世ならぬ世界の発見という目的のために互いにしのぎを削り、自らの道を探究したのであった。

東西南北を結ぶ交通の極めて活気に充ちた十字路、それゆえ、メトロポリタンの多様性の街として生き続け、中世からほとんど変わらぬこの街には、埋み火のごとくマニエリスムが、伝説が、今でも熱く息づいている。

(いとう いっとうさい 画家)



伊藤一刀斎《伝記——ことある度にそれはやってくる》